

候處當驛には人數千人計集り居申候殊之外混雜にて市中には一軒之明  
き家も無之町々東西神社佛閣に至迄兵士充滿いたし居中々旅人之泊り  
杯は思も不寄去りとて立歸るへき方も無之當驛之町年寄升屋惣兵衛と  
申者以前入魂に致候に付同人宅へ罷越事をわけ相頼候に付同人世話に  
て漸く芳野屋徳兵衛と申者方へ止宿仕候此處にて承候得は當所に屯集  
致居候總大將は佐々木式部と申仁之由に御座候且又升屋より之噂には  
五日之取合は雙方炮戦のみにて格別之事無之由翌六日之合戦は長州前  
田之御臺場より炮發致候玉も異船には届兼異船より之玉も前田御臺場  
には届不申候由右之次第にて臺場よりは朝五過迄炮發致候得共其後は  
見合陸軍些弱り候者と相考彌増相募り間近く寄來り一同烈敷打立候に  
付所々臺場等も打崩され右之混雜にて臺場詰之人數も引除き後に當り  
候茶白山と申所に屯集致居處異人共引續き上陸いたし勝に乘し茶白山  
をも乗取直様長府之御城に攻付可申勢に御座候尤茶白山は長府御城に

續き居候處にて御座候然處長州方へは引退候も計策にて右異人を思之  
儘に引寄茶白山之西手に地雷を仕懸待受申候處如案異人共勝に乘り右  
場所へ攻來候故地雷一同に發起し二百人計も死傷有之たる由に御座候  
味方には格別死人無之候得共手負等は四五十人餘も有之たる由噂仕候  
翌八日には同所發足いたし是非とも下關迄は罷越度心組に御座候處前  
條之次第にて何分途中無覺東且所々にて旅人等も切殺され候様に取沙  
汰有之候に付右船木より引返今宿と申所に泊り申候藁筵包都合十五六  
荷山口に持越候を見受申候是は國守之御覽に供へ可申候事に御座候尤  
今日之立合にも打取生捕も餘計に有之たる由取沙汰仕候且又長州世子  
は當時吉田驛迄御出張に相成居候由に御座候其後船木山中驛之間にて  
長府世子毛利宗五郎様と申御方へ行逢申候右は是迄山口に御出に相成  
居今日御歸城之御様子に御座候御供仕人數都合二百人計も可有之歟と  
見受申候翌九日今宿發足右途中にて承候得は小郡之向沖之山と申所に



て浮浪四人生捕候由所之者共何之心もなく右之山に参り候處浪士籠居候に付異人取合中士人は勿論百姓杯に至迄一人も不殘軍役に罷出候留守にて取押へ候人も無之農家之婦人等相集り無難生捕申候由且又前日山中手前茶店有之候所に暫休足仕居候處手槍を携候人一人参り私共に尋候には何國之者にて何用にて此所迄來り候哉と相尋候に付生國用向等一々相咄候處同人申候には迎も是より本海道往來は六ヶ敷可有之其上此あたりうろつき居候ては如何成災難に逢可申哉も難計爰許より中之關に参り程好便船も有之候は、早速渡海致可申旨殊更町寧に指揮致候に付隨其意直様中關に趣申候右同人之申分には自身も以前は坪井あたり滞留致候事も有之たる杯噂仕候中之關には便船も無之殊更當港は一切船留にて致方も無之夫より西之浦へ參豐後高田船へ便船致異儀なく豐後浦邊と申候處着仕候右船中にて蒸氣船一艘姫島之方より下ノ關へ向参り候を見受申候是は當月十日之晝比にて御座候夫より中津へ

罷越日田へ出筑後を通り昨十九日八半過に熊本へ着仕候以上

甲子八月廿日 (元治元年)

彦 藏

右は坪井米屋町 伊勢屋<sup>吉井</sup>某<sup>井</sup>手代毎年粒甲丹賣方として諸國へ行此節津國より歸國之序に中國筋形勢等見聞之まゝ咄候を書取おきつ商人の記憶精確尤以可稱哉



探襍錄卷十八

一 清末藩主願書之事并長府藩主願書之事

本家松平大膳大夫家來之者先達而脫走仕候に付家老之者へ申付爲鎮靜差登候處却て浪士輩に被相誘去月十八日恐多も於輦轂之下及騷働候儀全大膳大夫父子之命令不相守不届之儀に付右家老之者共毛利淡路守へ預置御差圖奉伺猶父子共深奉恐入慎罷在候就て於私儀も不存寄儀とは乍申本末之間柄誠以奉恐懼候依之同様慎罷在候何分前條之始末深御取扱被成下候様偏に奉願候以上

八月十六日 (元治元年)

毛利 讚岐 守

浪士鎮靜攘夷歎願として本家松平大膳大夫家來之者爲罷登候處去月十八



十日夜

禁闕近及騷擾候由於私毛頭不存寄事柄にて一入苦身罷在候處京師留守居役之者罷下り巨細之儀承知仕實以奉輕

朝廷絶言語候次第深奉恐駭候に付謹慎罷在候勿論大膳大夫父子に於て聊別意無御坐候處家老益田右衛門介福原越後國司信濃等大膳大夫宿志に違背脱藩之者に被誘及暴動候に付右三人とも毛利淡路守へ預置何分御差圖相待候由就ては大膳大夫父子共深恐入慎罷在候間右之邊之儀等被聞召分被下候様伏て奉懇願候已上

八月 (元治元年)

毛 左京亮

二 長州征討之幕命に付我 中將君御建白書と云もの事

長州御追討付ては將軍様御進發も被仰出候得とも萬事御不取締之御模様江戸より申來候付 御存意之次第別紙寫之通出來長谷川仁右衛門御使者被 仰付早打にて京都江戸へ御建白被差上候事に御座候此段爲御心得申達候條溝口藏人へも御差廻候様存候尤右寫披見相濟候は、早々可被差返候以上

九月七日 (元治元年)

殿

今度於 闕下長州狼藉之次第一統憤怒いたし候程之事に付幕府之御煩悶如何可被爲在哉近年 神州之御氣運日を逐及衰頽候處より如是變動も致出來候處御處置斷然と有之候は、右之變動却て中興御開業之御根軸にも相成可申天下目を側て奉窺候折柄御征討御進發之被仰出は有之候得共御期限も今以相分不申惣督副將之命も被下候へ共追々致變更其餘列藩人數



繰出等之儀も前後之御沙汰首尾不仕彼是御内輪之儀御不整之由唱候者も有之軍旅之樞要は人氣之奮立第一にて遠國邊土に至迄猶更右様之唱承疑懼を生し候は必然之勢にて其内には兩端を持候向も難計即今之形勢にてさへ甚以無心元往々如何成行可申哉實に案勞に堪不申重疊思惟仕候處差寄惣督之方種々差障も有之候は、乍恐 將軍様藝州あたり迄急速に御進發山陰山陽四國九州之諸侯伯御自身に御指揮被爲在四道一部々々之紗帥を被立其向より得と及談合大概一同に打入候場合にいたし一刻も御成功を被遂候と申御覺悟相立其儘實地に被遊御乗出候は、末々至迄も人氣一時に振立たとへ不良之心を抱候向も自然と無二之忠節を盡候様相成可申左候得は

皇國治安に趣候も生靈之塗炭に落入候も其大機關は今日之御一舉に可有御座無此上大切至極之御時節に候處是迄之有姿にては中興之御開運何程に可有之哉末は列國割據之勢に變化も難量誠に切迫之御處置片時も御遅

延御座候場合無之晝夜寢食を安し不申候に付不願萬死言上仕候誠恐誠惶頓首謹白

九月 (元治元年)

御名

外夷四ヶ國之軍艦馬關に駟入いたし先月初より度々之戰爭長州勝利を失ひ其後和議相整追々退帆いたし候由候得共今以二三艘は碇泊罷在候様子に致承知候然處外國と相應し且其敗帆に乘し御自國御征討有之形に相成候ては天下之義膽に差障り候間相殘軍艦も速に致退帆候様御處置被爲在度奉存候以上

九月 (元治元年)

三 或人大坂より時勢手簡之事



長州征伐も初之勢と違鈍れ候様相見何様笑止なる事に御座候水戸加賀阿波土佐杯より御建白有之候へとも一も

叡覽には達不申との風聞又會評判増々惡敷七月十九日京地類焼前には五萬兩計も町家より押借いたし候との風舌既に長田作兵衛實弟三ツ井店には會士參り用金出し候様申聞候に付御易き事に御座候得共公義より被建置候店方に付何方よりそ書付御渡し候は、差出可申段申出候處追てと申立除候由長田より承申候且又寺町御門へ焼出し受居候御用達運送之米も拾五俵歟會押取致候由於京都申出候事承居申候右等之事外にも段々惡事を擧如何に奸計を回らし候とも詰り相顯天罪を受可申趣薩會桑名大垣之名を顯し洛中下民共と申仕出にて三條橋へ張出し申候由桑垣は相伴なるへし先は右之段迄早々如此御座候以上 九月十日 (元治元年) 失名氏

#### 四 長門征伐と云幕議に付尾張老主願書之事

征長惣督之儀は誠に大任に有之何分不才抱病加之事情にも不精候間輕易に御請申上御國家を誤候ては其罪莫大故再三御直裁之儀を奉願候處猶頻に被仰下候に付ては最早彼是決て不申上下愚を忘れ御請申上專心力を盡し聊御恩に奉報度就夫申上兼候得共右重大至極之任に付十分之御權柄不被下候ては號令難行屆儀に奉存候依之左之條々御許容被下候様此度御答次第速に取懸候様可仕心得候事

一 征長に付ては全權御授之事 長州へ被屬最初より之手續并今日迄之情態等委細に御知せ可被下候事

一 攻撃之遲速進退其外方略等之儀は事に臨み無餘儀取計可申候事  
一 追付御用蒙候諸大名差當難澁之筋より氣込に觸候ては御鋒先に關可申と深心配仕候に付妻子江戸居住之儀當分御猶豫之事但弊藩之儀は右不拘罷下可申候事



右様全權御授被下候は、自然打見之姿幕威相分候様相見え御嫌疑を招可申哉と誠に恐懼心痛至極之譯に付最初より幾重にも御直裁御隨從盡力之義御威徳御中興之爲萬々懇願申上來候次第に付此意底徹御恕察御憐考之程伏而奉希候事

九月 (元治元年)

五 長門追討と云幕命後更に藩君諭告之事

今般追討軍勢差向候由其節に至候ては誠意恭順を盡し條理明白可及弁解候乍然不得止致亂入候節は多年之微衷所不愧天地以死奉酬 鴻恩而已此旨趣相心得於遂奉公者可爲本懷候 月日缺 (元治元年)

六 長防兩國出口々々新制札事

周防長門太宰萩宰相 神國之守控之事

一天下之 君を奉守護犬羊に齊き外夷を掃はんと欲す是を拒み我領分に軍馬を差向候者於有之は假令幕府上使たり共即剋打捨一人も生而返し申間敷候仍制札如件

月日缺 (元治元年)

吉川 駿河  
毛利 筑後  
宍戸 美濃

七 因州藩在京之家老上疏之事

頃日長藩士洛外に屯集仕候義を口實と致し匆卒之機に乗して



鸞輿を奉促候様密々相企候向も有之由紛々其聞へ御座候街談巷説には御座候得共近來之事情彼是熟考仕候得は全巷説にても有御座間敷と奉存候抑 帝都 御動座之儀は乍恐天下之御一大事に御座候往昔源平南北之亂等或は暴臣己か利を以て是を奉要或は姑息之難を被爲避杯にて 御遷幸被爲在終には

皇威不可回に立至候覆轍毎々有之于實

皇國千載之遺憾に御座候然は方今如何様之形勢を申立 朝議を奉惑亂候向御座候共決して御動搖可被爲在筈には無御座候得共動輒すれば種々之蜚語を設け 輦轂之下兵器を携騷擾に及び卒然 天朝に奉差迫候者有之杯と唐突言上に及 上を奉要是從來之所爲にて既に去年八月十八日廿七日之事等其一證に御座候近來上下壅蔽事情難分付ては 上におゐても自然往昔之事蹟等被 思召出候如何様之御驚動無御座候共難申上候然處今代之事件は元來攘夷之御國是着眼之異動か差起候儀にて彼源平南北之時勢

とは隔絶相違之儀にて方今苟も奉對

上候て兵を抗し候者有之道理は決して無御座却て勿卒右等之事を申立候者こそ機會を以不可謂之御厄難を醸成候ともにては有御座間敷哉万一左様之機相見候へは不奉待 朝命 闕下に馳參し乍恐

玉體を守護し

宸襟を可奉安候何分如何之義申上候者御座候共確然御凝重 御宗廟之

御神靈を御擁護被爲遊天下之時情を 御鑑定被爲遊度無位陪臣共僭越之罪奉恐入候へとも切迫之形勢何共難默止儀に付私已下在京之者共一同萬死を犯し泣血奉懇願候此段可然御執奏被成下度奉存候誠恐誠惶再拜頓首 敬白

七月十日 (元治元年)

松平相摸守家老

津田雄次郎

鵜殿主水介



右上疏は因藩士數人一橋公へ出近日

鳳輦を彦根へ奉遷風説有之候に付追々拜謁申上遂に上書致せし寫

### 八 藤本御奉行明細書之事

覺

當七月十八日夕敷方より呼使被差越候間直に參申候處稻葉様より長州人推上京も難計候間御守衛御人數寺町堅め残り分は外向應援に被差出候様御沙汰有之候由にて其咄合可被致と致呼寄候面々志水新之丞中山平左衛門桑木又兵私に候津田は痛所にて不參仕候御人數割手分ニ申談に相成近來は所々僭伏之浮浪も有之長州人は伏見山崎天龍寺へ餘計に致屯集致極々煩敷追々事にも相成可申寺町は片手にて相堅め片手は外向御應援に究り浮浪共南禪寺を伺候唱も追々有之同所は兵糧玉藥御武器御米銀

等被集置御人數ニ根據にて御人數出拂候節乘虛浮浪之徒燒奪共致し候ては總御人數之存亡に懸候所柄にて大切之堅め場に候へは充分堅度候へとも外に御人數無之候付敷方以下御役所一手之堅めに相定都合三分之堅に談合決申候敷方以下御役々連人在御家人迄大躰六七十人も可有之此人數は決て散不申南禪寺致守衛居若寺町御人數に戰起り候へは僅片手之事に付同所物見役より早馬にて知せ候節にて其節直に馳付可致加勢又黒谷眞如堂は會津之本陣にて長州深く會津を恨居候由に付是に押寄候も難計兼て諸事御申合之御間柄之上御隣陣にも若押寄候は、傍觀は難相成其節御備手出拂候へは是亦南禪寺より敷方引廻にて後卷之申談に相決右之通手組手分相濟候に付孰も引取志水は右之次第津田へ申通御備手申談明日書付相達可申と相分申候然處翌十九日未明に歩御使番津野田儀左衛門參り福原越後伏見より三四百之人數引連往還堅め場打破り罷登大佛邊に休居候模様ニ段申出候に付直に敷方に參り桑木佐貳役も馳付候に付同道致



出勤候處砲聲近々と相聞俄に御人數繰出等烈敷混雜早朝より之事に付早速より炊出之手當御武器之運送諸懸合同等機密間御所共根取御物書實に目面を掴み御勘定方御武器方等無類之繁劇に相成私一人にては如何にも受答も出來兼申候程にて同目面を掴み居候處藪方より被呼寺町之注進寸計無之出方いたし見可申方にも可有之哉と被申聞候付夫も宜敷可有御座只今被迦候て宜候哉鳥渡尋見可申と機密間御役所へ打合申候處此繁劇に今暫被迦候ては御用捌兼申候段申出候に付其段申達無程注進も參可申と申置候尤私より留迎は仕不申候坐に參居候處引續尙又被呼候に付罷出候へは只今御留守居より重役を御所より被召候段申出候間罷出可申御所之事に付中山可被致同道等之段被申聞候間召に御座候は、此方は無御構早々被出候様跡は私相堅め居可申と申達候處直に供觸に相成被打立候様子に候處中山より私へ申聞候は只今御所焼失路筋塞り被出向も相分不申と聞込候間先探索住江を遣見可申との事に付左様にて宜敷候哉と申聞候處

遣見六ヶ敷時可致同道と申事故左様は、其通被申達候様申向候其後無程長州より總敗軍にて戦も相止寺町は無何事に相濟候と外聞之歩御小性より申出候由暫いたし住江罷歸御所焼失は間違にて無御別條志水にて宜敷候間致同道御用相濟御書付受取參候間直に相達申候依て藪方御所出方にも不及御人數兩手共寺町一所に出居候へは差寄同所加勢も先不用に相成候に付其儘出方も被見合東山へ長州人落込候評判有之候に付御國亡命之者杯は御陣所案内功者之ものも有之旁南禪寺守備之申談にて藪方主從并に御役所一手連人在御家人迄天授菴を守衛に相成申候形を以申候へは恐懼遼巡之誹も起可申候へ共事實は右之次第遼巡之儀は聊無御座事は其時御役所一手之面々數人之耳目も有之其上御目附杯見分之趣も可有御坐其砌御役所繁多之儀は去八月十八日よりも烈敷有之候由にて私儀は廿三日迄は如何にも迦し出來兼寺町御番所色々打變り願立有之現實見分不仕て分兼候付廿四日之夕暫御目附に頼置南禪寺中を出見分仕候事に御座候其



節之有様直と見分不仕跡形を承致考察候は、事實大に相違仕可申此儀は士操に懸候事にて不容易唱に付何卒得と御聞糺可有御奉存候以上

九月 (元治元年)

藤本常記

一六月四日藪方着京に付同夕同人方旅宿へ歡候處日入後中山左次右衛門參り同平左衛門兩人にて私を呼立候て内々申聞候は今日桑名侯より左次右衛門へ被仰聞候には近日洛中潜伏之浮浪を御手を被附候筈にて若手に餘り候節は御依頼も可有之其節は可被成御頼との御噂有之候段被仰聞候と申出候に付夫は至極之事に付其連にては明後日坂崎方被致出立候ては不宜候間藪方へ申達暫留方に相成候様可申談と申直に右之趣申達候處坂崎方留方至極同意に相成翌日坂崎方出立は被留候事但右浮浪潜伏之儀其時分極々煩敷如何成譯にて公儀より御手は不被附候哉探索方へ聞出候様申聞置候處一向相分り不申と計申達に相成候處本行之通左次右衛門承出候事

一同六日朝御留守居兩中山相見夜前之騒動承候哉と申聞候處未何方よりも承不申段致返答候處一昨日之浮浪狩早昨夜御取起にて討取召捕二十三人有之候由申出候尤夜中之事に付未明白に分り兼候に付御留守居方始探索手歩御小姓杯手を分探索いたし追々相達候書付其後追々差廻候通に御坐候然處桑名侯より一昨夕中山左次右衛門へ被仰聞候通にて早浮浪狩被取起候間寺町御門御堅め丈引殘御人數は御申越次第小人數なから差出可申手當仕置候との儀御留守居より申達置候方可然と咄合相決其旨左次右衛門より桑名侯へ申達候事

一右之通申達候に付寺町御門は坂崎方一手に無役着坐大組等にて受込に相成候様御家老不御詰間にて坂崎方津田兩中山桑木私呼出にて藪方より衆議に相成一決之上坂崎方領掌相成候事

一同七日中山左次右衛門私旅宿相見桑名へ申向置候御加勢御人數之儀諸侯一紗之儀に候は、少人數なからも參可申 此方様計御加勢と申儀は



不安意且寺町を餘計に迎候儀も不安心と坂崎方御物頭杯より今日申出に相成候に付只今より桑名に参り此方様計り御應援と申儀は些と心痛之稜も有之諸藩一統御加勢被仰付儀に候へは小人数なからも差出可申と申向直に参候筈之段申聞候間私より昨日彼之通申向又申直しと申は笑止成事と申聞候處成程左様におもへとも御備手より右之通に付致方も無之依る自身氣取違にて昨日は彼之通申向候へ共諸家一統と申儀申落候段は自身届かね候段程能可申向と申引取に相成申候其後翌日歟承候へは桑名より返答に勿論諸家一統之事にて尊藩計可被仰付譯も無之其儀は昨日只今御申向之通相心得居可申と致返答候と申儀承候事

一五日之騒動後中山左次右衛門より探索生出方に相成些と内話有之候に付承候様申候間天授菴客間にて逢申候處吉田鳩太郎草野平藏兩人にて吉田より申出候には五日之夜之戦に長州人町御奉行之同心を切長州の屋敷に馳込候に付是非長州屋敷を御踏潰無之ては相濟不申段會桑に參

り建言可致申出候に付論説は若年之面々尤成論に候へ共夫式之儀彼程差入居候會桑之面々不心付譯は無之長州未朝敵之名を受不申故浪人狩りと唱へ長州屋敷より書出候名跡之外譬へ長州人たり共浮浪と見切狩捕正實之長州人と取合候へは私闘と相成可申故先見逃に致可有之右之論申入同意に候へとも所々に手を分居人数足不申何卒此方様へ踏御有之候様に共咄合申候は、夫丈之人數も無之相對に從是懸候へは彼よりは憤怨を受別て御國之海路は長州にて是を被絶候へは差依大坂之海運斷御勝手向も差支不容易處置にて當時此方様浮浪等追捕之御職掌にも無御座候へは危き建言は見合候方可然と申聞候尤長州暴舉發顯遙前に候事

一同廿三日之夜九半時比田崎範次郎稻田三郎兵衛参り唯今會津藩士廣澤富次郎と申者参り今夕長州人五百計枚方迄推登同所に泊り着込杯着し居候由不穩様子に付知せ候尤寺町御番所にも申聞候段申出候に付寺町



増堅め之儀志水新之丞始御物頭杯同様にて増詰之段達に及せ申候事  
 一同夜七半比津田三十郎より物見可兒清藏を遣御番方一と組之内二た組合を殘之外は皆増詰として寺町へ出候筈之段答有之承居候内敷方より津田相見急に參候様申參候に付直に參り申候處右増堅等之咄合にて外に何ぞ相替候咄合之儀も無之候間西手は嵯峨山崎南手は伏見へ歩御使番杯を外聞に遣可申と申談引取居候時は夜明に相成途中にて會津藩小室金吾に行違候處咄合有之様子に付天授菴に同道致承申候處長州人枚方へ參居候事は承知之通に候處先時西山嵐山邊に當り明松大分相見行列體に見候天龍寺は昨年長州宿寺にて有之此所に廻り屯集共致居申間敷哉物見之者出置申候此方様は桂川御堅場と存候間知せ候段申候付當春迄は御堅場に候處御免に相成當時は御堅場と存候間知せ候段申候付當春迄は御堅場に候處御免に相成當時は御堅場無之段致返答候處引取申候事

印合  
紙付

印合  
紙付

本行明松之儀は雫火を燃候由翌日相分候事

一同廿四日長州屋敷動搖之節鎮靜方被仰付候段中山平左衛門より紙面に  
 て達候に付寺町堅め丈外御人數無之近日増堅被仰付候に付ては外に繰  
 出候人數有合不申候間此段爲御心組御届仕置候段中山より稻葉様へ御  
 答仕置候様敷方より中山平左衛門に返書遣に相成候事  
 一同日七時分歩御使番村田熊喜同御小姓吉田伊兵衛參り今朝物騒之様子  
 承候間兩人申合伏見に參り肥後屋清兵衛宅參り承膳候内長州之士四五  
 騎乘通候由承所々御堅場も有之不審之事に存罷居候處何橋とか申橋際  
 之扇子屋共有之向之羊羹屋隣に宿にても致居候様子にて乗馬四匹有之  
 印無之槍劔付筒共持居候を見受小者體之者は長州御印之法被を着居候  
 由見受候段申出候是にて長州暴舉之形初て相分申候事  
 一右之次第敷方に申達參且長州家敷鎮靜之一件も咄合居申候處暮比中島  
 嘉左衛門益田勇伏見探索之歸私旅宿へ參候處留守に付跡を追敷方に參



り申出候趣右村田列申出に大體相替候儀無之尤長州人大體伏見に着仕舞爲申由にて多く甲冑着込等致居候段申達候事

一廿五日之夜五半比中山平左衛門馬上を參り只今稻葉美濃守様より御呼に付參り候處此方様寺町御守衛長州屋敷鎮靜之儀被成御免伏見御堅被仰付候段被仰渡御書付御渡被成候に付受取參申候御受之義は自身一己之見込にては出來兼申候間重役申達追て可申上段申達引取候由申聞候間致承知詰間に參り相待被居候様申聞津田桑木機密間に人を遣敷方に參候様申遣御番頭兩人御目付佐貳役等打寄咄合に相成申候差寄其砌一紗相危候儀は堂上方二派に相成被居候由にて一派は一橋公會桑名永井様等關東方一派は長州方にて因備之兩州も同腹之唱にて長州を引入會津派を追拂朝敵之名を負せ可申との企有之由専ら相唱中山左次右衛門杯京出立前にも其所を心遣之由にて一橋様永井様方も大に御心遣に相成候由咄承居申候又御備手は 禁闕御守衛として是迄寺町を相守居既

に事有に望洛外に被出候儀御疑を受候形甚不安心之由又伏見は中々備廣之所柄にて僅二手之御人數にて相堅居敵堅場に懸候へは御人數有丈力限之働より外可致様無之其儀は覺悟之前に候へ共所々方々舟上り場も澤山町筋も餘計にて何方より上り脇道より推通可致上京哉も難計其節に至り脇道上り候に付不存と之申譯は相立不申肥後之御人數油斷にて突通候故京地之變に相成候と申に相成候ては屹度御國辱に相成可申去迎所々へ手を分候丈御人數は無之將又伏見取合居候内前文唱之通長州之堂上方志を得謀計被行會桑追拂長州手を引入に共相成候へは會桑却て 勅勘を受可申左候へは自ら此方様も會桑御一和之御事に付同く勅勘之御名共相立候ては大切至極にて初伏見御堅被仰付へき哉之御様子に付右等之當り障りも有之幸中山左次右衛門出立之事に付下着之上可奉伺と申談早にて出立に相成居候へ共夫も間に合不申右之通被仰右稜ん一として不輕事而已藪方以下僅五六人之研究甚心元なく存候へ付



とも何様御國辱さへ不引起様致研究急場凌居候内には申越に相成居候御人數相登り可申其上にては如何成事も支不申右様御國伺方は間に逢不申最早此方見切之取計外可致様無之に決迎も 勅勘御國辱等之恐有之様之危道には不寄方可然九門御堅之儀は奉始 君上御國一紗御承知之御事にて不相替是を守り居敵寄來候へは涯分丈之働勿論にて右様之悪名を受可申氣遣無之又九門に寄候敵は總て朝敵にて味方毎官軍之名義を不失此儀無伺之取計には大丈夫と申に相究り中山御書方も呼寄に相成尙咄合一決之上御斷に相成申候御斷以下之事は其節差廻置申候に付略仕候事

同廿七日私儀下痢にて散々相煩引入居申候處夕方日入比中山平左衛門私旅宿へ参り長州之軍勢増切迫に相成今晚洛中に推入福原越後強て致參内候筈之由に付寺町御堅一しめ嚴重に有之候様との御沙汰に候段申聞候に付私儀被見候通散々下痢にて難澁いたし引入居氣分も甚悪敷雪

隠に通張居候間何卒直に藪方へ被參其趣被申達候様申向私は根取を呼右之次第申聞御備手に御人數繰出等其外諸手配等例之通急に取計候様申聞兩御番頭を始御役と出張に相成申たる由承其内探索之面々病床に参り洛中之模様共申出候へ共突留候事は無之只々諸家騒動御堅之御人數烈敷出張會津候は一萬計之人數にて參 内に相成是より事始にて一紗騒動之由承申候然處私儀も引入打臥居候ても何分不安心に付夜五時比に相成杖突位にて強て出勤致し御役所見繕申候處中々騒動にて種々手配等咄合次第手配も相濟申候處伏見之方に參候歩御小姓より申出候には大佛以下之往還筋には通に居坐共出し男女打交り涼み居何之様子も無之段申出候御役所も先無事に相成申候間私も下痢は頻に相催益不氣分にも有之大體御用も相片付候に付下宿仕可申と藪方に斷申候處早々保養を加候様被申聞候間引取可申と仕候處上村彦次郎宇野丈之助中島嘉左衛門より逢度申入候間直に逢申候處一橋會津邊之應援に少々に



ても御人數を出し赤心を明し申度左無之ては會桑より寺町御門之鎖鑰被取揚候も難計と寢耳に水之入候様に申出候處御人數は寺町に出切御役所に御人數は少も無之在御家人共少々居候へ共門々を堅居是も寺町より助勢申參候へは不遣ては相成不申一橋會桑は去冬以來兩公子御別段御周旋厚き御咄合之藩々にて御互に御依頼と存居候處今迄何之異説も被承込候事不被申出俄に只今赤心を不明ては鎖鑰も取揚候杯と申は如何成譯に候哉御番頭杯も今夕之差入之様子にては無味には渡しも致間敷同志喧嘩杯に相成不申候へは宜敷と申候處左候は、自身一橋會津之内に參り人數少にても應援に出候儀出來兼候段申聞候ては如何程に可有之哉之段申出候間異な事を申候とは存候へ共其儀は兎も角も程能見込に被致候様申聞相別候處引續中山平左衛門逢度段申出候に付右上村も同道にて參り唯今寺町へ參り一橋會津邊應援に少々にても御人數差出度段御番頭へ致相談候處足輕一組位は迦し支可申段返答に付在御

印合  
紙付

家人二十人計被差添候へは探索家杯參候へは大體五十人計に相成候に付其手配候ては如何と申候に付只今上村氏より御人數出之儀咄合に相成候へ共出候御人數無之段申向候處御番頭右之通迦し方合點之上は此方に存寄等可有之譯も無之併在御家人は寺町之助勢之筈に付永屋さへ致承知候へは宜候間中山より先下た懸合に永屋へ打合居被申候様申相別直に奥へ出御番頭御人數分之儀致承知候由に付永屋合點致候は、被差出候ても可然哉と右之次第申達相伺候處御番頭其通申候は、被差出候ても可然段被申聞直に中山を被呼候て右之次第申聞に相成申候又私より永屋は何程に候哉と尋候處致合點候段申出候に付左候は、一剋も差出され候方可然と申談相決候に付直に其手配に相成候間私は前文通益不鹽梅に付御用之節は申遣候様申置御目附に頼置下宿仕打臥居申候處八半比にも有之たる哉吉田鳩太郎下宿に參り寺町御物頭より御達無之由に付足輕を出候儀難相成段申候由申出候に付私申候は先時中山平



左衛門尊御番頭より足輕一組位は迎し可遣と申談相決候段申達に付御物頭より異論は無之事と存候處其通に候は、拙者は極々不鹽梅に付只今下宿致打臥候間其趣御役所に直に參り被申達候様申聞鳩太郎は天授菴に參り申候無程御物書立山五郎作參り探索家より七條に御人數出候に付御幕高張御陣屋懸方に付材木大工炊出百人前位被差立候様如此書付木村小七より相達急に被差出候様申達置罷出候處如何取計可申哉と之段伺出に付陣場之儀は中山より寺敷町家之内借可申と申候又洛中に勝手に陣屋建方は何程に候哉其上夜中材木運も大工之手配も六ヶ敷去逆寺敷町家借出も如何に可有之哉に付御幕と御幕串之竹繩早々遣挑灯は有合候は、高張遣候様炊出も四五十人之人數之由に候へ共及不足候ては相成不申見配遣候様及差圖申候其後罷出候御家人二十人迄にて騒動空騒動之上足輕不參所にて餘り人數も少く候に付大里八左衛門引上連歸爲申由に御座候夜明候處に津田私下宿に參り御人數分け可遣との

儀中山には自身共よりは不申聞に分け遣可申と自身共上より及返答候段申達候由右に付在御家人も出候由足輕は御物頭より出不申如何之間違に候哉志水は不承哉と尋候に付未相見不申段申聞候處左候へは天授菴に出居可申只今より參り話合可申と引取に相成申候翌廿八日終日引入居申候處昨夜は何之故も無之空騒動にて今日は九門も毎之通開門に相成御番所々々も通例之人數に相片付候段承申候夕方に相成中山平左衛門藤本彌三郎同道にて相見昨夜内意申達候御番頭咄合之件御番頭も御物頭も御人數分け之儀承引無之筈之由之處承引在之候と申達内輪些間違有之候へ共何様早卒之儀申達奉恐入候依て挨拶に參候段申出に相成候所にて彌三郎より平左衛門も笑止之儀致出來氣之毒千萬にて引入之覺悟も有之様子に候へ共當時之形勢殊更一人之事に付左様有之候ては御用差支申候に付右様之儀無之様存候段申出候に付御番頭との咄合黑白は追て之事にて差寄引入等有之候ては大切之時分御用辨兼候間



無頓着勤有之候様申聞申候尤右之次第は藪方へも參申達候由申出に相成申候

印合付紙 本行赤心一條且奥に記置申候來翰之内一橋公へ御届と有之を以考申候へは一橋會津之内と探索連より相對に應援之約束爲仕置共にては無之哉不審之事に相聞申候様に御座候事

一廿七日之夜之騒動右之通御役所之始末に御坐候處或人御國へ申遣候書翰大分相違仕居申候間右書面之内段々に左に認分此儀書を以現實之處認來翰前後不用之處略申候來翰之寫

會津桑名始不輕御君を疑近來之處彼是後難を省之兩端を懷候様成形にも乍恐相見申候に付今晚寺町御門之鎖鑰被取揚候様なる勢に相成御留守居始探索方不殘甚懸念仕候由にて御役人甚當惑に相成今晚之處は聊之御人數なり共長州防禦之諸侯に爲應援急に竹田街道九條邊迄人數被差出筈に相成其人數は御物頭引廻し二十人處々探索連不殘差添私も御

印合付紙

家人十五人引連御物頭に差添至急に出張仕候様被仰付候間早速其用意仕御家人は皆甲冑を着先寺町御門に參候て探索連は既に寺町御門より打立參居候間御物頭は如何哉と尋申候處少々内輪間違事起り應援之儀は受さる様に相成

印合付紙 本行之通御役人當惑より御人數出方御役所より起候事之様認有之不輕相違之事に候事

此儀會桑杯より疑かと申儀御留守居よりも探索よりも其砌何共申出無御坐追々探索同士集會有之様子は咄承候へ共聊右様之噂無之廿七日之夜御人數出之事申出候節上村より初て鎖鑰之事申出候に付本行之通返答仕候事にて御役人當惑と書面に相見候へ共何ぞ當惑仕候譯も無之故是又本行之通及返答申候御備手出張之儀は兼て手當有之事候へ共此節御人數出之儀は中山上村列望にて俄に出候へは兼て覺悟も無之事に付不足勝と被考申候右様應援御人數出之儀前以御留守居探索達之内より



にても兼て申達置有之候へは御備手抔とも申談諸事と存候へは右之通何共不申出所にては惡敷唱は無之事と相考へ居候儀當然と奉存候公義より之命を受暴發之長州を討候に何故後難を恐可申哉軍事尤御備手之受にて是に御尋にて後難氣遣有無は相分り可申候將又幕之儀は本行之通立山五郎作に相渡候様及差圖候通にて同人より渡候て相聞中島嘉左衛門紙面には會津勢と一所に幕を張り陳列仕候と有之候へは全く御渡に相成候儀相違無之と相見申候又九曜御紋を長州勢に被見知候ては御國も會津方と被見後難來り候も難計夫より永屋共より御幕致催促候へ共私より一切聞入不申とは如何之申分に候哉御幕は御紋付相渡置又御國は會津方と申儀は諸藩不存所は一ヶ所も無之何故其節に限可憚譯可有御坐候哉存懸も無之事に御坐候私は御人數出候方に致決着候間其段御役所に申聞下宿仕候儀にて永屋とは何之咄合も不仕候幕之事を承候様も無之又大里は永屋を引廻に遣候由にて跡達て承申候夫故永屋にも

大里にも面會は不仕事に御坐候へは何一つ遮候事も無御座譯にて御座候

小松帶刀返答に在合之人數千人計之内三四百は三郎様三男某公子に附置候間殘分は何時逆も差支無之段申候由右之通に付御國は如何歟と會より尋申候處近來之御國議にて探索連も不輕返答に困たる由に御坐候御國之御備も唯寺町御門さへ守り候へは宜敷歟と相究居候へ共寺町は格別事之急なる場所にて無之ク様之時に成丈急にして危場所を受持被仰付候こそ男兒之榮と奉存候事に御坐候他藩より御國之人數を臆病者之様に甚以輕蔑仕甚以口惜次第に御座候只今之様に後患を恐候ては却て後難を引出共は仕間敷哉と奉存候將又折角御連枝様御周旋之御主意も無甲斐様に相成歟と乍恐考申候會より申候に寺町御警衛も朝命台命を重せられて之事に付此節暴發打手之御人數被差出候も手配置候へは萬端行届可申處元來御人數は御役所受に無之に騒動之真中に本



行之通に寢耳に水之入候様に申出人足等之手當も無之手當丈には寺町に參り居諸事届兼は當然歟と奉存候

折角應援之儀は一橋公迄も御届に相成居候間出張不致時は僞に相成且又事切迫に及居猶豫仕埒にも無之願曰是丈之人数なり共一同に參度段相談仕申候間直に東洞院を下り竹田街道九條邊參り已に夜明前に相成小人数を他藩之人に被對候ては如何歟と存路傍之水車小屋に埋伏仕會津之陣に住江艸野兩人參候て人数出張之段届申候處會津も歡且返答に存外事も急成にて無之只今之事は至て靜なる事に申候由扱夜も次第に明會津始諸藩之陣は皆昇を立幕を張堂々たる模様御坐候處

此儀差寄一橋様へ應援御人数御届と申儀御備手も御役所も一向存知不申事にて外向應援に御人数被差出候様との儀は七月之御達にて此時分迄は何方に應援御人数被差出との事は一切未御届等には相成居不申候依て手分手配等も無之前文之通俄之事にて手筈違も出來之譯

に御坐候尤探索連一己之申談にて一橋公にも届仕置候哉其儀は答無之故御役所には存候者無御坐候

私共は幕も御渡無之然も二十人計にて餘り辱敷會津杯之人数に不被知様に潜り居候へ共往還際にて格別藏れ所も無之ク様之人数にて他藩之者より是か肥後之應援之人数歟と被嘲候は必然之事にて無此上御國辱と存且事も靜に相成候間其靜成所に譯を付會津に先引取候段届候て速に引取申候既に日之出通にて御坐候間南禪寺迄之途中にはか之通様に實に可笑敷事にて御坐候其跡にて探索連は尙又出張たる由に御座候右之譯は一橋公へ應援之儀は御届に相成居候に付御沙汰無之内は引取事は六ヶ敷に論候由左候へは私儀は引取間敷場を引取候形に相成申候へ共元來御物頭へ之差添と被仰付候に付御物頭を離て出張譯は無御坐事に候へ共至て切迫之場所にて彼是思案仕候埒にては無御坐事と奉存候て其儘出張仕候事に御座候然處事も穩に相成夜も次第に明候に付御



國之人數少を他藩に被見拔其嘲を受候儀は必然之事にて畢竟私出張仕間敷處に出張仕候間御國辱を引出申候間甚以恐入申候間事之穩成處之譯を以引取候間出張仕候儀は恐入申候へ共引取候儀更掛念不仕事に御座候

此儀御幕之儀は本行之通に付渡候に違無之又此所にも一橋公へ應援之儀は御届に相成居候と有之候へ共御役所よりは一切左様之儀無之何某より御届仕候哉不審之至に御坐候何も御届之儀は御役所御僉議之上御留守居を以御届御坐候處其手数は絶て無御坐候又御人數少且出向等不足ひ之儀は書面之通可有御坐候へ共根元御役所に御手當無之上探索生より御人數扱扱と申儀は夢に存懸無之事に付御番頭故障無之と申事にて出張之手配は仕候へ共中々大急之事人手一切無之夜は短し御幕扱も及延引候儀可有之御人數少之儀は御番頭留守居之間に間違有之たる様子にて御役所より可存譯無之候へは致方も無之

事に御坐候

然し此節は他藩之人は少人數之事は一向存不申御國も應援之兵を被差出候と申て近來は大分世間之向きは都合宜敷事に御坐候由近來は内輪大不調にて御番方も説區々有之候由且又一體之御國議甚以疑惑仕申候不怪後患を恐れ兩端を懷居候様に世見より專申候私共九條より引取内輪之模様内々承申候處此節應援として出張仕候と申候へ共陳幕扱は一切御渡無之筈にて有之たる由其譯は自然九曜之御紋を長州勢に知られ候ては肥後も會津方と被見如何計之後患來候とも難計夫故永屋共より幕之事を催促申候へ共御奉行より一切聞入無之實に長大息之至に御坐候

此儀都合宜敷事は元來惡き事無之故當り前にて可有御坐敷少にても惡敷事有之候は、御留守居并探索隊より不申出譯は有之間敷惡敷唱等聞出御役所へ知せ候儀聞役探索隊之當前に御坐候處前後何共不申



出は悪敷唱無御坐候故と相考申候私之相對事と違御國之榮辱事に懸候事に付少にても悪き唱有之候は、聞出知せ候爲別段探索家と被仰付置候

矢張 朝命台命に相違無御坐候間如何に 闕下とは乍申急成場所を避緩成所を御撰み相成譯は有之間敷杯勵候由久留米生より申候由辭には左様に申候ても死る事を人に勸め候は六ヶ敷杯と面り嘲り候由甚以口惜次第に御坐候

此儀右様之唱何某より承爲申哉御役所に一切知れ不申候又御備手にも知候は、定て申達に相成可申事に候へ共何之届も無之御留守居探索連よりも何共申出無之右様之唱有之口惜次第と申儀誰も尤之事にて夫れを聞出し不申出は探索等之職分如何之心得に可有御坐哉若私には何そ不平之稜も有之不申出譯も御座候とも全く御國辱に相成候儀に付君恩を奉思候は、暫も聞置可申譯無之早速藪方歎御目付始又

は兩御番頭御物頭組脇等數人之御役々總て御備に懸候面々御座候處一ヶ所にも不申出申は何と程之儀に候哉甚不審之事に御座候右様之儀一ヶ所にても申出候は、承候人も早速其筋々申出に相成候は勿論之儀に御坐候處一人も申出無之所にては御役所も御備手も不存に相違無之ヶ様之儀京都にて申出て社屹度御爲に相成候を彼地にては不申出御國に申遣候とも何之御益に相成可申哉忠誠之人之可仕事に可有之哉彼地にて不申出譯は御糺方有之度奉存候

且又近日之騒動に御雇も今日迄一度も不差立是も御物入を厭候事歎探索連も大に憤り手腹にて早打罷下り度段を願出居申候  
此儀空騒動にて何そ突留ヶ様と申儀無之少は趣意相分申候所にて可申越と差控居僅御飛脚且雇等之御出方何程之事に可有之狼狽候て譯之分さる注進いたし候とも只御國は疑惑迄に付疑惑無之様見定候て差立可申御人數登等之儀は去る五日浪人狩之後申遣に相成申候へは



外に今明と急候事は有之間敷と一紗咄合に相成申候内輪右様之譯は外人之可及譯無之に御出方を厭抔推究候申分如何

丁度之時分京都より之御召被爲在候間御上京之御内御出馬被爲在候へは御間に不被爲成御逢御壯年様は別て如何計御遺念に可被思召上京地之形勢は一橋公御惣督之由にて不日に御人數被差向候氣色にて御上京被爲在候とも一橋様方も長州へ御下向に候へは被仰合候御方も有御坐間敷平穩之京地に空敷被爲成御出候より先長州御出陣之方思食にも可被爲叶又御國之儀は南方乘虚之恐も不少京地にても諸藩より疑居候所も段々御坐候由之唱も有之御出馬に被差懸自然御疑惑之筋共差起りと右御見合不被遊候て難被爲叶時御病氣等被仰立候ては藤堂様御父子御病氣にて御上京無御坐御評判も不宜に御出馬に萬一左様之儀共爲被在候ては内輪不存世間之唱も如何に付海岸御防禦も餘計之御國近年異船之患も有之自然之節は御國被遊御守護御二方様之御内御名代被爲成御

勤候ても不苦儀に共候は、一ケ度之御辨利に可被爲在勿論御出馬被遊候御儀は必然と奉存候へ共若被差懸御伺旁御座候様之儀差起候ても往返中に日敷を経期限も廻れ可申も難計一向此許詰御役人心得を以奉伺置候は、御上京とも御出陣とも御出馬とも御在國とも如何様とも御不自由之爲出來俄に御伺等之御手敷も不被爲在御儀と衆議之上伺取に相成申候事に御座候

一下着之上承申候へは探索家之面々上村初一人として私より叱りを受不申人は無之段頻に唱申候由誠に存懸なき唱にて御座候旅客之情は連人さへ容易に叱り抔は不仕熟和に暮候程之事にて同志は猶更相依頼仕候情態は御承知之通に御座候譬不快之儀有之候とも不都合に叱り抔と申儀同士之輩に可出來事に御座候哉併御役前にて同意之出來兼候儀は氣之毒なから同意仕候ては御格合に差障候故不得止事に御坐候御飛脚雇立等之儀は御間々々之御用により起候儀御承知通に御座候處探索家抔



之指揮可仕譯も無之事に御座候勿論早打願等一向一人も出不申候探索家憤杯と申は何たる謂にて可有之哉尤兼て御役所をも寢を起し可致勢に相見居害に相成候段申達置候儀先ケ様之事并俄に御人數之扱一橋様杯へ御届有之たる杯之件々にて御察可被下候  
私共下坂之儀今暫は延引仕可申却て新規上り大筒手を暫大坂に被差置候由右之譯は伏水御受持御斷之儀共旁御人少と申譯も爲有之由夫より御人少中より俄に下り候ても俄に登込候ても都合不宜由是杯も可笑事に御坐候何様可然御役人早々登りに相成候へかしと日々相待居申候人心之向背實に可恐事に御坐候

此儀長州人不穩體にて登り込候に付大坂之方も其無心元様子にて佐野より永屋手之御家人半分にて差下候様申參り永屋よりも其段申出尤之事に候へ共長州人目指候處は京地にて其砌之切迫中々左様之取計出來不申種々申談居候内幸大筒手は大分後れ着坂之模様付東

風西風往復も中々虚日も致出來一向大筒手を暫着坂之儘坂大坂守被仰付候ては如何との咄合に相成候其趣志水に打合申候處御家人も五十人大筒手も四十人大體似寄候人數にて御家人居候へは大筒手滯坂不苦段返答に付其通大坂に御達に相成同所も安心之様子に御坐候外に子細可有之様無御座候右等之儀總て御役所御僉議之事に候へは外人可存譯も無之悉皆考察之書面にて笑止千萬に御坐候別紙に

別紙寫

堺町敗北之長州は寺町より横矢を打申候へは大に勝利を得候筈に御坐候處其後無之探索生よりは頻に促申候へ共上より之御主意に可成丈は長州之恨を不取様との事にて二條之手負を打取候も御奉行よりは甚笑止なる事と申候由明日なる朝敵に今以後難之事而已慮り義理に暗き様に御坐候事

此儀如何成書面に候哉探索生より堺町之横矢を促候と申儀其砌一切



承不申候却て廿日之朝神足十郎助甲冑にて相見昨日は口惜き事御坐候今少し遅く寺町へ参り候へは長州之人丸太町敗北に行逢少々は討留可申筈之處寺町御門内に繰入候跡にて敗北いたし丸太町を逃通爲申由残念之至と咄申候嘸々残念に可有之と私よりも致挨拶申候事に御座候右様之懸に御座候へは知せ候人有之候に何故暫猶豫可致哉不致は顯然に御坐候探索生は何某にて寺町御人數は何某に促爲申哉御侍之剛臆に懸り不容易事に付屹度御糺有之度事に御坐候一通は神足存居可申奉存候何故に上より長之恨を可成丈不取様と御沙汰に相成可申哉其御沙汰有之候は、第一御備に御沙汰に相成居可申何某に何方より御沙汰に相成爲申と申儀御番頭御物頭組脇之内には實て承知仕居可申此儀も御尋に相成候は、早速相分可申と奉存候又二條手負打取候儀は長州人二條河原に手負行倒居候に市中より枕藥抔遣し有之息々絶々言語も不辨打臥居るを首を落候と承居候處其後翌日歎

志水相見候時分笑咄に分捕書と申稜書を出し實は拾物なり此内首も一有之是も拾首と笑咄之節私より返答に成程左様に承申候自身に打留候者に候は、當前に候へ共手負之行倒には不入事と笑咄は仕申候勿論朝敵を打取候に何しに笑止かり可申哉御推察可被下候

一七月十九日大變之儀は追々録上仕置候通にて新に認込候事無御座候尤其日之儀藪方之事に付ては先は右田様迄書付差出置候通にて外に相替候儀無之候

一七月廿四日長州追討之御達有之御武門之御榮恐悦之御儀に御坐候然處召上は固より澄之助様良之助様嘸々可被遊御勇處良之助様は其筋申聞不同意又は押へ候様之事抔は御坐候其譯は諸藩に深入不致様或は前文吉田鳩太郎會桑へ建言等之事に御坐候其意に不合事は總て叱り候抔と申觸候哉勿論探索生氣に不合事を申聞候節は彌以言語を用心いたし咄合候へは随分丁寧に心得一度も理屈義論之體に渡り候儀無御座候他藩



に深入不仕様申聞候儀も其砌探索家之模様只々會桑を無類に信仰いたし何事も會桑にさへ致依頼居候へは宜敷様に心得多く會桑より被仕遣候形にて所々より肥後は會桑之手向きと唱候由因備之一派は大分目指候様にも相聞此方之儀も會桑之儀を以推退候勢何も會桑と申談何方に建言杯と不怪自負之様子に相見若年之面々自然深入いたし拔指不成様之事致出來御役所之御難題共引起候ては如何と甚心遣仕候に付私より探索連に申聞候には當三月迄は御二方様御滯京にて諸事御委任被遊御家老衆大監衆も數人之詰込御小姓頭御用人同役迄も數人にて御政事を始御處置等大小共此許にて御決議被仰付候に付各方と申候ても御二方様之御内命も可被爲有又御家老衆之合等も可爲有之左候へは他藩之面々に咄合と申候ても差入り咄合も出來居爲申と推察いたし候然處近來は三月迄と違御二方様も御下國御家老衆以下諸御役々も下國に相成俄に代役衆以下總て一人詰に被仰付御留守番之事にて御國議に

懸り候儀は皆御國伺之上に無之ては御役所てさへ決議出來兼候へは各方は尙又之事にて些重立候咄合は重役に申聞可及返答と被取切各一己々々之處置筋は會讀講習も同前に付存分申述に相成候ても宜敷候へ共少々ても御政事筋之咄御國家之御處置筋等懸候儀は決て取極候咄合等無之重役申談之上返答に致置兎角深入いたし咄合候へは後道拔指難成相成候ては御爲合相成不申段心を付置申候是等之儀當時自負之面々に新參之私申聞候儀内實は不平と相聞申候へ共氣遣敷事を不申聞ては私も相濟不申右之通申聞置申候兎角若年之浮氣説多く氣遣敷敷方始機密間杯も餘程心遣に相成居申候其後六月廿八九日比探索人之内兼て私心易仁參り自身共御役所より疑にても可有之様之事は無之哉と尋に付其儀は何程に可有之哉乍去俄に御人數出之事共は疑問敷ものにも無之得と考見被申候へ廿七日之夜迄一橋會桑杯より此方を疑候杯と申儀一度も何共御申出置無之夜中騒動之真中に俄に赤心を明し不申ては會桑よ



り鎖鑰取揚可申も難計と御申出又御人數出場は私より中山に何方に出る哉と相尋候處七條下邊に出可申と申候に付私より頃日二條三條之際長州屋敷之時さへ間違互之應援不届と御備手より故障有之此節は遙に遠く七條下ると申は尙又故障可申出と申候へは夫は三條四條にても出さへいたし候へは宜敷と申候又陳場は町屋敷寺を借と申候に付其通之事と存居候處跡達て承候へは矢張七條下る所に出候由又陳屋建に付材木大工之事も書付出候處にて相考候へは其節御人數不出候ては各方に於て不相濟譯も可有之様相聞又洛中に陣屋建杯と申は前以伺取にも相成居爲申形に相見左様之儀有之候は、前以御役所へは御知せ置無之ては彼通差懸候ては甚迷惑候事に付右之形を以考候へは疑無之とも難申彼之様之事は以來は無之様有之度心易に任せ私見込之趣咄候段申聞候處是は成程其通り之事と深く存當り候様子と相見申候其後一紗神妙之様子に相見申候處却て裏に廻り右之事一紗咄合御役所より御國へ付廻

し無之内面々之不束を掩隠せんため種々無量之事を申立早々付廻し爲申共にては無之哉總て探索家よりケ様左様と計書付にも噂にも承申候是は私考察に候へ共前文來翰一々間違又世間之唱も一と通り是は成程其通之事も爲有之と申儀未一つも承不申候へは甚以不審之事に御座候右探索名前は態と認不申候若御入用にも御座候は、認上可申候右は當六月初より於京地御役所重立候御用取計筋右之通に御坐候惣て衆議之上取計に相成一事として一己之取計は無御坐候故相詰之面々御問合に相成候へは早速相分り申候然處前文或人之來翰は私下着之上初て一見仕誠に恐愕仕候間萬端之齟齬も甚案勞仕此儀書を用置候通大に現實致相違何を踏に致し相認申候書面に候哉難解事に御坐候此儀書も一々向合明白に候へは何卒些御聞合有御坐度御國辱にも懸候唱書面之通實に候は、數代御恩を奉蒙居候臣下御留守居并數人之探索生より餘計御役人に一人にも何とも不申出儀は於其職如何程可有御座哉結構之



御取扱ひにて被差越候も天下之形勢を承り夫々申出京地之御處置御國辱之儀無之ため可致探索事共には有御坐間敷哉書面之様子に候へは探索家々様左様と有之彼表にて同士々々迄咄合可申出所には不申出様相聞如何成子細に候哉御國許へ可申越儀勿論之儀に候へ共第一京都之御處置急務に付先京地詰之御役々へ申出候社詰込御役人之心得に相成可申處其儀一切無之極々不審之事に御坐候前文にも認候通私へ不平之儀有之候共御國辱に懸候儀を聞捨に致置候儀は臣下之不忍所にて御備手御役所にては數十人之御役人に絶て不申出譯は決て無之筈に御坐候左候へは前文書面通相違而已多所を以推考いたし候へは全體形無之間違にて誰となく申出候所謂流言浮説共にては無御坐哉と案勞仕候私儀は不束之身分如何被申候とも不苦候へ共御役所御備手御役々一統に懸候事柄にて其内には重き御取扱之身分之衆も段々有之不容易事件相違之儀乍存黙止仕候も不本意之事に候間詰中取計等之儀明細に相認入貴覽

申候外人之書翰評説等に付御役所内之事は不案内推考より間違出來候事も可有之候へ共何様間違は大間違にて藪方御目付機密間其外御役人御備手相詰之面々御問合御坐候は、早速明白可仕と奉存候得と御研究可被下奉願候以上

元治元年十月

藤本常記

御奉行中様

九 贈大納言源烈公之遺臣伊賀守武田正生等素懷之書取之事

戊午以來從

天朝醜夷掃攘之

勅諭御下し被遊候を贈大納言殿日夜憂慮被有之防禦之計策數度建白被致



候へ共遂に不被行臣子至情遺憾無此上當中納言殿にも去亥年上京之砌  
公邊を補佐し攘夷之成功を奏候様と之蒙

勅命 天盃眞之御太刀迄拜受被有之歸府被致候へ共何等之効顯も無之候  
に付有志之者一同焦心辱を勞思是非醜夷之凌辱を雪き御國體相立候様と  
の存込より決死盡力義氣を鼓舞し罷在候處當五月中從

天朝被 仰出候鎖港之儀 公邊より御布告に相成を奸徒市川三左衛門等  
江戸表に登邪説を鼓張し百方相妨候に付有志之者一同申合領内江村へ引  
取居候處右奸徒等兵卒を指向發砲致候に付無據接戰に及候然處 公邊之  
御人數迄も願下候趣後に承り兵之存意無之は勿論に候へ共其有司は因循罷  
過候て兼て攘夷之

勅諭も水之泡と罷成 偷言如汗之大義分毫不相立候ては臣子之分如何哉  
と深憂念仕候衷情より右事件に差移申候同穴之闘を不本意に御坐候に付  
一先江村を避遠去致候事に御座候間理非分明相成微志貫致候様仕度至願

に御坐候有志之者情實御瞭察宜敷御取計被成下候様一日も如何之御處置  
蒙候共遺憾無御坐候以上

元治元年十二月

武田伊賀守

正生花押

加賀中納言様御内

永井甚七郎殿

私共多人數引卒是迄罷登候次第先般以書取奉歎願候通聊素意上達仕度  
趣意に御坐候處何分當節身柄に落入候ては願書等御取上難相成段は被  
仰渡奉畏候然上は事實之行違より移來候儀とは乍申 公邊御人數と打  
合候儀も有之殊に軍装にて是迄致潜行諸藩爲致動搖候段實に天下之御  
大法を相犯不相濟儀深恐入奉存候に付尊藩軍門へ向一同降伏仕候何卒  
此所可然被仰立如何様共御處置被仰付候様伏て奉願上候右様言上仕候



上は元より決死罷在候儀聊彼是申立候筋無之候へ共只々先般奉歎願候  
通如是成行御事情は實に其謂も御坐候事にて曾て奉對 公邊御後聞き  
意念を懷大不敬之舉動相働候儀は無之候處今更空敷流賊之汚名を相蒙  
候様にては千載之後死て有遺憾儀に御坐候間武門之情此段は於尊藩別  
て御酌取宜敷御辨解被成下候様奉願候決死之一語他に申立候儀無御坐  
候以上

元治元年十二月

武田伊賀守

正生列

加賀中納言様御内

永井甚七郎殿

昭和六年十二月二十日印刷  
昭和六年十二月廿五日發行

探禊錄第二  
非賣品

不許  
複製

編輯者 東京府豊多摩郡杉並町大字高圓寺  
四百十八番地 大塚武松  
發行者 東京市四谷區新堀江町三番地  
日本史籍協會代表者 早川良吉  
印刷者 東京市京橋區新湊町五丁目一番地  
高橋赤次郎  
發行所 東京市四谷區新堀江町三番地  
日本史籍協會  
電話四谷三二八七番  
振替東京三九四五番



64  
259



終